

## 日本住居形成史再考 —「二棟造」の再評価—

Reappraising the history of Japanese dwellings:  
On the another meaning of FUTAMUNE Type in Kagoshima

揚 村 固

AGEMURA Katamu

(Received October 1st, 2004)

We have been coming to a conclusion that the stereotype of traditional housing in Kagoshima is FUTAMUNE Type. It is correct, if only standing on the fact of actual existence of old houses in narrow area. But it is not true that this type should be unique only in Kagoshima and South West Islands. We can find out the same kind of form of traditional houses in Hyogo Prefecture, Tokai District, East Side of Kanto District and Izu Islands. Hakoki House in Hyougo Prefecture, the oldest heritage of houses in Japan was found that it had been BUNTO Type, actually the same type with FUTAMUNE Type, before the middle of Seventeenth century.

FUTAMUNE Type is not only the typical form of traditional house of Kagoshima District but should be the former type of the Japanese Housing.

### 1 問題の所在とその背景

鹿児島県の伝統民家の住居形式は、分棟型「二棟造（ふたむねづくり）」とされていて、ほとんど疑いを持たれない。だが、果たしてそれでよいのであろうか。

それは民俗学と建築学の調査研究の成果<sup>1</sup>を経ながら九州南部と南西諸島（旧薩摩藩領内）を代表する形式とされ、現存する遺構と記録から比較的容易に受け入れられて来た。

約十年をかけて行われた全国悉皆調査（「民家緊急調査」）は、昭和40年代末にほぼ完成をみる。全国の現存する伝統民家の全貌を明らかにするもので、日本の「民家研究」の史料の基盤を確固としたものにしたという意味で意義が大きい。結果として日本民家の地域的多様性を認めたくてで伝統民家を網羅して表現することが可能となった。

しかし、そこにはこの調査が本来的に持つ性格による派生的欠陥が存在し、そのことが「住居形成史」の研究に弊をはめてしまったきらいがあるように思う。

建築歴史の調査研究はおおむね実証主義であったと言ってよい。現に存在し時代が不詳でない遺構と文献史料の存在が研究の素材であり論拠である。こうした方法論は「歴史学」に倣うところが

大きい、論点の科学的客観性を保障する方法論として唯一とっていいほど重要な手法である。

だが、その論法はあくまでも現物・遺構・史料（文献）を出発点とするものであって、特に木造民家遺構のようにほんの昨日のような「現在」に近い「過去」を対象とする限界に留意する必要がある。こうした研究方法を当然のこととして進めるなかでは、みずから史料を飛び越えるような論考は出現しにくい。遺構史料の存在しない「過去」とのつながりに言及することは極めて危険なことであり、してはならないことである、とされてきた。

しかしながら、「民家研究」によってなされる住居形成の通史と多様性の説明は、一万年を超えようとする「住居形成史」の最後の章（民家に限れば高だか500年、長さにして二十分の一を超えず、映画に例えれば最後の五分間程度）を表現するものであって、人間存在とともにあった住まいの歴史からみれば極めて短くもどかしい。それゆえに、「住居形成史」から発する素朴な疑問が否応なく発露するのである。

冒頭に述べた思いは、近年参加した共同研究<sup>2</sup>によって、より強いものとなった。

## 2 研究史

すでに述べたとおり「かごしま」の住居形式は分棟型の「二棟造（ふたむねづくり）」（「ふたつや」と呼ぶ地域もある。）とされた。ここに至る研究史のなかで嚆矢とするのが、野村孝文「南西諸島の民家」1961(昭36)年(文献2)である。氏は、大学を出た後直ちに朝鮮半島にわたり京城高等工業学校教授として終戦まで半島の建築について研究していたが、昭和23年に鹿児島大学（県立）に赴任するやこの地の民家研究に着手した。この書は、氏が九州大学に赴任（昭和34年）する前後までの調査研究をまとめたものである。

この書が言及する調査地域は書名にもあるとおり、大方が「南西諸島」である。書中の実例は、南端を先島の波照間島として沖縄本島を含んで本土に至る、まさに「琉球弧列島」の全域をカバーする最初で唯一の研究書である。（鹿児島県本土については第4編で「ナカエ」についての論考で23例を掲げて検討している。）氏はこの地域の民家を総称して「別棟型の…」と呼称して（「分棟」も一部で使用）おり、いわゆる「二棟造」を使用しない<sup>3</sup>。おそらくこの民家形式を表現する地域的表現に行き当たらなかったことが主因であろうが、本人は「熊本県の二棟づくり、二つ家との混同を避ける」ためと述べ、県本土の一部に「フタツゼ（二つ背）」の呼称があることも同時に認識していた。

この地域に関する研究の次の契機は前述した「民家緊急調査」であろう。鹿児島県は、昭和47年に文化庁の補助事業として調査に着手し、同50年に「鹿児島県の民家-鹿児島県緊急民家調査報告書-」（1975）（文献3）を刊行した。調査対象は、鹿児島県本土を主とし（離島は大島本島と甬島のみ）一次調査250件から二次調査38件を選定し、さらにそのうち14件ほかを三次調査としてまとめた。

当時奈良文化財研究所員で調査と指導にあたった沢村仁氏は、「調査した民家（農家）の80％が分棟型であってきわだった特徴」であることを述べている。

ここまでの調査研究で、南西諸島と鹿児島県本土の両地域に共通した住居形式は、かまど・土間・いろり・板床を中心とする生活部と、畳座敷を中心とする高床の接客部を独立した構造で建ててそれぞれに屋根をかけた「分棟型」であることがクローズアップされる結果となった。この報告書の上梓後ただちに、二件（下記）の近世民家遺構が国の重要文化財に指定（昭和50年）された。

### 3 「二棟造」は固有の形式か

同じ調査報告書のなかで、沢村氏はあえて野村の言う「別棟型」を使用せずに、日本本土にも「分棟型」の住居形式が存在していることに触れる。「分棟形（ママ）と呼ばれる中にも、現状からみると、南西諸島形と本土形の区別があり、本土形にも南九州形と中部・関東形とで内容上のちがいがあある。」と述べて、鹿児島県の分棟型住居に固有性を見る。近世民家の様相の多様性からすれ



写真1 二階堂家（国指定重要文化財昭和50年）（筆者撮影）



写真2 祁答院家（国指定重要文化財昭和50年）（文献13所収）

ば、同じ「分棟型」にも成立から調査時点までの地域的変容過程があらわれて そのように総括することも頷けなくはない。しかし、土間を中心とした部分と座敷を中心とした部分がそれぞれ独立して建設され、それぞれに屋根を葺いて一つの住居を形成する住居形式が日本のあちこちに存在したことが重要である。

### 4 箱木（千年）家の衝撃

決定的だったのは、日本最古の民家として周知の例、兵庫県の「箱木(千年)家」(文献4,5) (写真3,4) である。室町時代に成立したと考えられる日本民家の最も古い遺構標準形である。当初、この建物は土間と座敷で構成され一体的軸組構造の上に一つの屋根をかける「直屋（すぐや<sup>4</sup>)」形式のものであると考えられていた。しかし調査の結果、その前身が実は「分棟型」であったことが明らかになったのである。竈を持った土間、板敷きの高床部、そこに設えられたいろりなどで構成される棟と、明らかに高床のみで構成される座敷中心の棟が独立して存在した。もっとも古い時代に属する代表的「直家」の例である住居の前身が、江戸中期までは「分棟型」だったことが衝撃的だった。(図1)

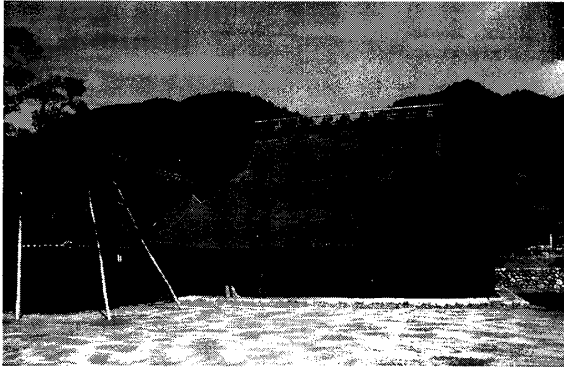


写真3 箱木全景家復元後 (国指定重要文化財) (文献11所収)

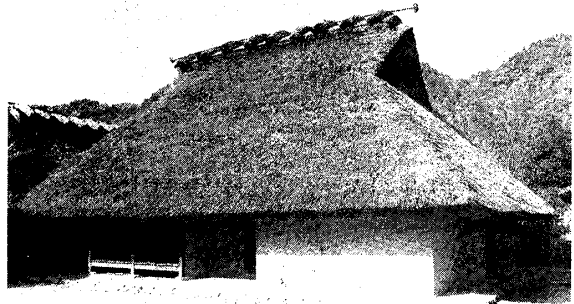
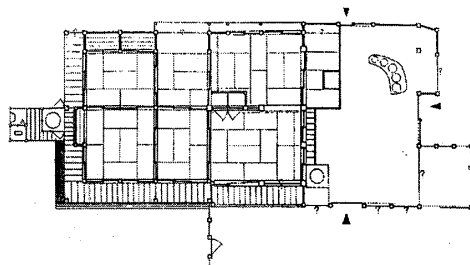
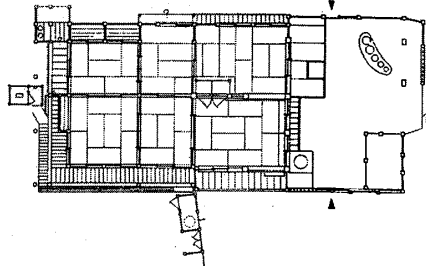


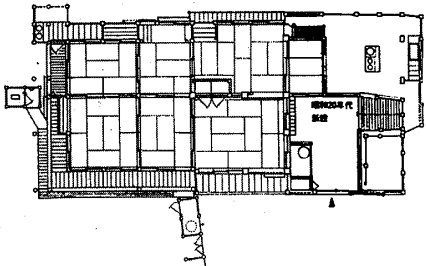
写真4 同「おもや」(文献13所収)



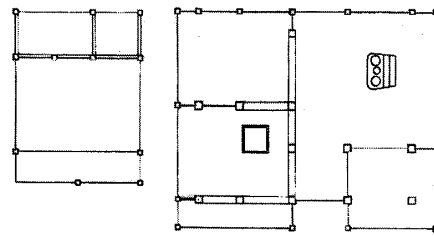
第17図 江戸後期の平面 離れ座敷を主座に通結する (欄間は寛政園による)



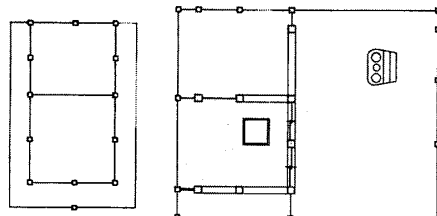
第18図 大正、昭和中期の平面 土間「うまや」の改修、新座敷の設け、黒島地の改修



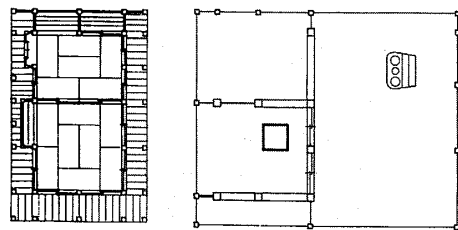
第19図 昭和37年改修平面 (修理前現状) 土間張出し部型の改修、同背高出入口取止「にわくろ」



第14図 室町後期頃の平面 1. 梁行を背後にやや拡張する。  
2. 離れ座敷の新設。  
3. 「ひろしき」及び土間の柱の撤去?



第15図 江戸初期頃の平面 主座、特に変化みられず。離れ座、第二次よりやや西方に移された (第三次)



第16図 江戸中期の平面 主座、特に変化なし  
離れ、第三次よりやや西方に移動  
(第三次とは柱間寸法に10センチ以上の差)

図1 箱木家平面変遷図 (文献5所収)

「直屋」の先行形態について検討するに足る史料的事実が現れたのである。一般に公にされたのは昭和33年の「中世住居史」伊藤鄭爾の刊行によってであった。にも拘らず、分棟型の先行形態としての検討はすすまなかった。史料の限界、類例が少なかったからである。一つの存在例の変遷過程としては驚きをもって受け入れられたものの、本格的には検討されなかった。

## 5 他の実例

兵庫県に存在して、我が国で最も古い民家遺構である箱木千年家だけではない。その他にも実は分棟型の民家は多数存在した。いくつかの例を示そう。

【静岡県】鈴木一利家 静岡県引佐郡(県指定重文S.49) (写真5,6) (図2)

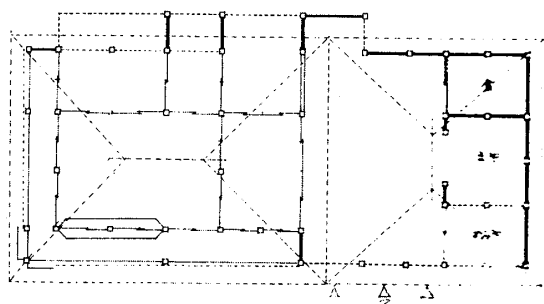
この地方で「釜屋造り」(鐘木造り<sup>5)</sup>)と称されるもので天竜川流域から豊川流域の平野部と山間部に分布していたものの一例である。平面形では「直家」に見えるが、座敷部である主屋と土間の



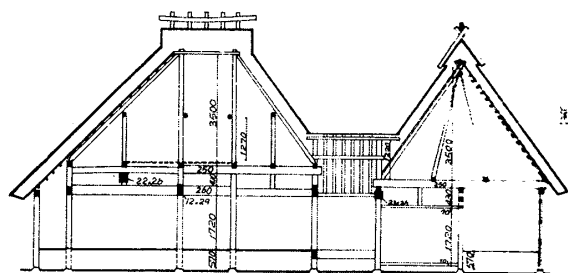
写真5 鈴木家全景 (文献6所収)



写真6 同 (文献11所収)



復原図



断面図

図2 鈴木家 平面図 断面図 (文献6所収)

ある釜屋の構造が完全に別で、屋根もそれぞれに棟の向きを違えて独立して架けて葺き降ろす。屋根の谷に大樋を架けて雨水を処理していた。まさに、鹿児島島の「二棟造」と同じ形式と言える。

こうした形式の住居が「遠江における唯一(固有・独自の意か)のものとされ、.....昭和30年ごろまでは数百棟にも及ぶ数であった....」(文献6)とあり、この地域に広く存在する住居形式であったことを示し、昭和56年時点でも数棟が確認されているとする。静岡県では、この他に「分棟」ではなかったかとされる例が2例<sup>6</sup>報告されている。

【愛知県】 愛知県では「釜屋建て」と明示されるものが3例<sup>7</sup>報告されている。一例を示す。

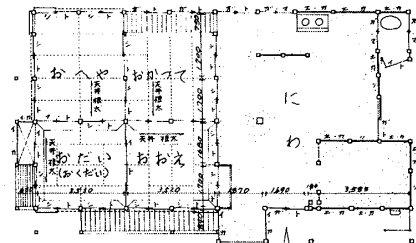
望月 武家 新庄市 (国指定重文S.49) (写真7) (図3)

18世紀後半のもので、四間取りの座敷棟に「にわ(土間)」と「まや(うまや)」からなる生活部が接続したものである。

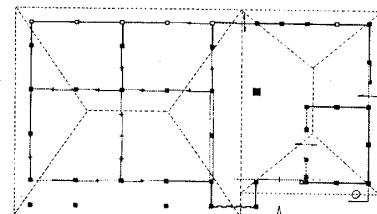
愛知と静岡両県における「分棟型」(ここでは「釜屋建」)は天竜川と豊川一帯に存在するもので、同系統に属すると考えてよい。



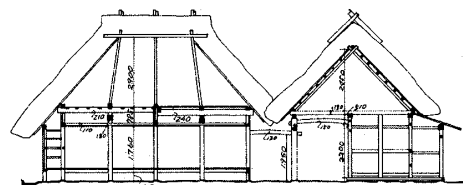
写真7 望月家全景 (文献7所収)



現状平面図



復元図



断面図

図3 望月家平面図・復元平面図・断面図 (文献7所収)

【千葉県】 千葉県では、安房地方を中心に実に7例の分棟型が報告されている。これをまとめた大河氏は、千葉県の安房地方に多く見られる分棟型住居の存在と評価について、「上総地方でかつてどの程度一般的であったのかという問題は、現在の調査の段階ではまだ不明であるが、作田家(次項)の建築年代が十七世紀後期にさかのぼるような古いものと推定されることと、また茨城地方に分棟型が現在も存在することから考えると、江戸の前期のころには作田家以外の上総民家にも分棟型がかなり使用されていた可能性が存在する。」<sup>8</sup>と記す。すなわち、千葉一円にかぎらない関東の広い範囲にこうした分棟型の住居形式が存在したと考えられるのである。二例を示す。

黒川 薫家 (館山市) (写真8) (図4)



写真8 黒川家全景 (文献8所収)

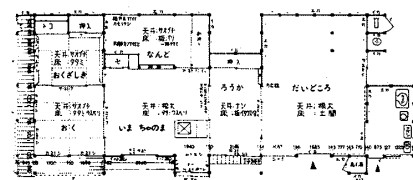


図2・1 黒川 薫氏 現状平面図 館山市山内845

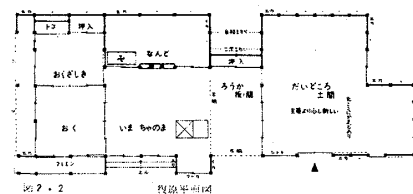


図2・2 復元平面図

図4 黒川家平面図・復元平面図 (文献8所収)

作田 右馬之助家（九十九里町）（国指定重文S.45）

（写真9）（図5）

発掘調査によって「分棟型」と判明。川崎市立民家園に移設ののち国の重要文化財に指定。



写真9 作田家全景（文献9所収）

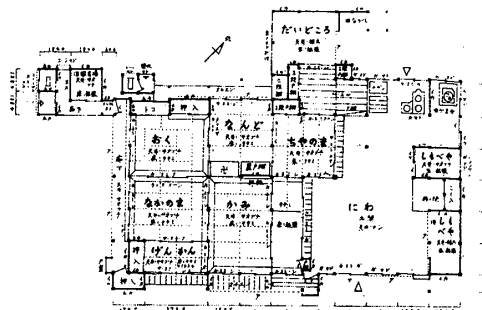


図8・1 作田右馬之助氏宅 現状平面図 山武郡九十九里町作田

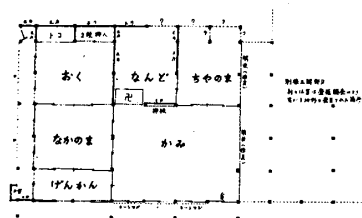


図8・2 復原平面図

図5 作田家平面図・復元平面図（文献9所収）

以上の実例などから、愛知県と静岡県にまたがる中部地方と、千葉県と茨木県にまたがる関東地方には確実に「分棟型」の住居が存在したことを確認できる。ほかに伊豆諸島の存在にも言及するものがあり、南から南西諸島、九州南部、中国地方、伊豆諸島、東海中部、関東東部にその存在が広がっていたと言えるのはほぼ確実である。ここから読みみとれる「分棟型」住居の分布は太平洋岸と日本南部であって、黒潮にそった地域に分布する南方的影響の強い住居形式であろうとの推論を引き出した。

つまり、「分棟型」住居形式は、南西諸島を中心とした地域にのみ固有の形式であったとは言えないことが遺構分布からわかるのである。それは、日本民家の成立を画する「直家」の成立過程を経ないまま、確認できるものでは17世紀前半から調査時点（現代）に至るまで連綿と存在してきたのである。もちろん、原始からここに至る住居形式の変遷過程をつぶさに実証することはできないものの、「直家」を介在させない住居形式が存在したことを認めることは困難なことではない。

すなわち、南西諸島と鹿児島県本土に分布する「分棟型」住居、「二棟造」はこの地域に固有の形式であると言い難いのである。

## 6 「二棟造」のもうひとつの意味

前述したように、この地方でもっとも古く由緒ある家で、日本に現存する最も古い箱木家が、「分棟型」住居形式を経て江戸中期に「直家」形式に至ったことを考えると、この地域の他の多くの家々が「分棟型」であったのではないかと推察することは容易である。同様の文脈は他の地域にもあてはまる。昭和58年（1983）に国立民族学博物館が特別研究としておこなった「日本民族文化の源流の比較研究」（文献10）によるシンポジウムの「すまい」セッションにおいて、まさにこのこ

とが正面から議論されている。

小川徹「日本民家の型式とその系譜」は、「二棟造は、標準型（室町期発現）に先行する広間型よりさらに発現を遡らせてもよいのではないだろうか。現在の二棟造の外的分布構造は、たとえば「南方系」の住居様式が北上し前進して太平洋岸に橋頭堡を築いた状況であるとみるよりも、かえって広汎に分布した古い民家形式が本土では後退に後退を重ね、僅かに踏みこたえている状況と考えた方が無理なく理解できる。」と述べる。「日本民家の型式と系譜」では分棟型式の古代からの存在を示唆し、室町期に出現する「標準型」に先行するのではないかとし、さらに八丈島の隠居を例にこれを「基本型」として先史時代の住居との繋がりを期待した。

宮澤智士も「分棟型民家は南方系か」と題して、基本的にはこの考えに同調しながら、史料的検討の不足からさらに多角的側面からの研究の必要性を述べている。ただ、この時点では「分棟型」住居形式を先行形式ではなく、「建築技術の水準が低かった時期の一形式であったと考えられる。」としながら、近世以後の残留形式との見方では一致し、さらに「東アジアの文化基盤を一にする地域の一現象であったのではなかろうか」との広範な地域を視野に入れることを提案しながらも、これらを「近世民家成立以後の各地に残留するかたち」ととらえ、「南方系か」との疑問には地域的限定を避けた。この二者に微妙な違いはあるものの、ともに「分棟型」住居が日本標準型に先行して存在した住居形式であったであろうことを否定していない。

日本住居のうち農家を中心とする各地の多様な民家形態が完成するのが、江戸中期、十七世紀中期であろうことはほぼ定説となっている。しかし千葉県の実例にあるとおり、同時期には「分棟型」住居形式のものが比較的広範に存在していた。（現存しないが栃木県では、史料<sup>9</sup>上で分棟型住居の存在が知られている。）これを南西諸島・兵庫・愛知などととも、それぞれの地域的類型に帰することは、もはや論理的に無理がある。

「分棟型」住居という住居形式が本土のおおかたに敷衍していた後に、高床の座敷を一体化した日本の標準形ともいえる住居形式が成立した。西日本ではこれが北から南に向かって伝播した。本州ではほとんどの地域で「直屋」形式が支配し、さらに「曲家（まがりや）」「くどづくり」等の変形に進化すると考えるが、鹿児島本土ではその影響が直接的でなく、座敷棟を別棟として獲得する段階のものが多く残り、構造を一体的にして建造する「直家」形式は主流とならなかった。

沖縄の住居も沖縄固有のものと考えられがちだがその祖形は「分棟型」である。当初「分棟型」であった沖縄本島では後に二つの棟が密接に接続し、その形が本島を中心として広まった。琉球文化圏に属した南西諸島に多くの完全分離型の「分棟型」＝「二棟造」住居が残ったのは、高床畳敷きの座敷棟を獲得して一体化する過程が本土から直接沖縄本島に及び、そこを起点として周囲に波及したために本島から隔たるほど影響は弱いものとなったと考えるのである。

すなわち、沖縄の住居形式も例外とせず「琉球弧列島」を含めた日本全土において、「分棟型」住居形式が普遍的に存在した住居形式であったと考えたい。



## 7 結 論

「二棟造」という分棟型住居形式は、単なる鹿児島県の地域的特質を示す住居形式を超えるものとなる。むしろそれは、「直家」に先行する普遍的な日本の住居形式を示唆するものであって、現存する遺構は、それを証明する史料価値のある遺構群であると考えなければならないのである。

(本稿は、2001年から3年間にわたって行った共同研究「日本列島南北端の住居形成過程に関する学際的研究」(科学研究費補助金 研究課題番号 13309004)の成果報告書に収録した「南端系住居形成史から日本住居形成史へ」の一部について加筆して再編したものである。)

### 【注記】

- 1 経緯については「日本民家研究の礎」(日本の民家調査報告書集成各巻巻頭論文 宮澤智士 東洋書林)(文献1)等に詳しい。なお、巻末に民家研究年譜掲載した。
- 2 「日本列島南北端の住居形成過程に関する学際的研究」(研究課題番号 13309004 研究代表者 玉井哲雄・千葉大学)
- 3 「二棟造」の呼称については稿を改める。
- 4 「すごや」と称する地域も知られているが、同意。
- 5 「鐘木造り」(しゅもくづくり)は、屋根の形状に由来するもので、二つの屋根の棟が平行でなく丁字様になるところから鐘の打ち木になぞらえたもの。
- 6 左藤睦美家(周智郡森町)、福井源二家(引佐郡細江町)など
- 7 伊藤武家(東栄町下田)、高木定家(豊橋市石巻)など
- 8 文献8「千葉県の民家Ⅰ安房の民家」大河直躬 P.6
- 9 「日光社参史料」(文献14)

### 【参考文献】

- 1 「日本の民家 調査報告書集成」(1-16巻) 東洋書林1997-
- 2 「南西諸島の民家」野村孝文1961(昭36)年
- 3 「鹿児島県の民家-鹿児島県緊急民家調査報告書-」鹿児島県教育委員会1975(昭50)年
- 4 「中世住居史」(東大学術叢書14)伊藤鄭爾/東大出版会1958(昭33)年
- 5 「箱木家保存修理報告書」同修理委員会1979(昭54)年
- 6 「静岡県の民家 静岡県文化財調査報告書第12集」静岡県教育委員会 1973(昭48)年
- 7 「愛知県の民家」愛知県民家緊急調査報告書 愛知県教育委員会 1975(昭50)年
- 8 「千葉県の民家Ⅰ安房地方の民家」千葉県教育庁文化課1970(昭45)年
- 9 「千葉県の民家Ⅱ上総地方の民家」千葉県教育庁文化課1972(昭47)年
- 10 「特別研究 日本民族文化の源流の比較研究シンポジウムⅣすまい」国立民族学博物館1983(昭58)年

西暦	和暦	事項
1932	昭6	『琉球諸島に於ける民家の構造及び風習』宮良当社/考古学雑誌(民俗学)
		『日本農民建築の研究』石原憲治/建築雑誌
		『日本農民建築 第1輯』石原憲治
1937	11	『琉球建築』田辺 泰
1950	25	文化財保護法制定
		『民俗建築』創刊(石原憲治会長)日本民俗建築学会
53	28	吉村家住宅修理(大阪府)
55	30	『東北の民家』小倉強、学会賞「東北民家に関する一連の研究」小倉強
56	31	横浜国立大学神奈川県民家調査開始
57	32	『日本の民家1-10』伊藤鄭爾、二川幸夫
		『因つ開取の成立』大河直躬、建築雑誌 57.5
58	33	『神奈川県における近世民家の変遷1』大岡実・関口欣也ほか
		『中世住居史』伊藤鄭爾
		論文「今井町民家の編年」太田博太郎ほか
59	34	東京大学長野県民家調査開始
		湖北地方民家調査(文部科学研究費)
1960	35	奈良県五條市町屋の編年と建築の変遷 浅野清ほか
		学会賞「日本民家史の研究」伊藤鄭爾
		『大坂府の民家』浅野清、林野全孝
		『三河地方民家調査』城戸久、鈴木ツトム
		論文「湖北地方民家の編年、類型」大岡実、鈴木充、宮澤智士
		日本民家集落博物館開館
61	36	『南西諸島の民家』野村孝文
62	37	『ふるさとすまい』日本建築協会編
63	38	『神奈川県における近世民家の変遷2』大岡実、宮澤智士ほか
		論文「甲府盆地東部の近世民家」関口欣也
		論文「佐賀県民家の形式分類と分布および古形式」青山賢信
		『民家調査基準1』日本建築学会
64	39	論文「民家における書院的座敷の成立時期の一例」宮澤智士
65	40	博物館明治村開館
66	41	民家緊急調査開始(〜77)
		建築雑誌「日本の民家」特集、「現在の民家研究の方向」大河直躬
67	42	『京都市の民家調査報告1』
		『民家のみかた調べ方』太田博太郎ほか
71	46	川崎市立日本民家開館
72	47	『日本の民家-その形成過程』朝日民家シンポジウム 代表者浅野清
		『日本農民建築1-9』石原憲治復刻版
73	48	財団法人文化財建造物保存技術協会発足
75	50	『続ゆく民家1、2、3』川島由次(76)
		文化財保護法改正(建造物の土地の指定、伝統的建造物群保存地区制度発足)
77	52	『高2-町並調査報告』奈良文化財研究所
78	53	論文「摂丹型民家の形成について」水井規男
81	56	『日本の民家』学研版1-8
		学会賞「論著『近畿の民家』など一連の民家研究」林野全孝
82	57	『書院様式』機関誌『普請研究』No.1-40刊行(792)
		『日本文化の源流の比較研究』国立民俗学博物館シンポジウムⅣ
83	58	建築史学会発足、『建築史学』刊行
		『講座・日本技術の社会史 第七巻 建築』玉井哲雄編
		『民家と町並』小寺武久
84	59	『日本のすまいの源流』杉本尚次編
		学会賞「民家」建築史学 84 No.3
85	60	『日本民家語彙集』日本建築学会
86	61	『すまいの人類学-日本庶民民家再考-』大河直躬
87	62	『因国民家博物館における民俗文化財保存の業績』宮澤智士
		『近世における住居と社会』『日本社会史』第八巻所収 玉井哲雄
89	64	『日本列島民家史』宮澤智士
90	65	学会賞『葉巻の民俗学』安藤邦廣
		『民家と町並』(日本の美術)5冊
		学会賞「民家再生の新しい方法論を確立するに至った多年の業績」降幡廣信
91	66	『民俗建築』No.100刊行 民俗建築学会
92	67	学会賞「『東北民家史研究』に集大成された一連の民家史研究」草野和夫
93	68	学会賞「『普請研究』刊行を通しての『普請研究』十年間の活動」普請研究会代表者宮澤智士
94	69	『日本民家調査研究文庫総覧』富山博編
		学会賞「日本民家史における近世民家の体系的収集保存、公開と環境整備」川崎市立日本民家開
95	70	学会賞「民家語彙の集録とその解説に関する一連の業績」民家語彙集グループ代表者野和男
96	71	文化財保存法改正(登録文化財制度発足)
		『日本原始古代の住居建築』宮本長二郎、中央公論美術出版
97	72	『日本の民家調査報告書集成』刊行開始
98	73	『先史日本の住居とその周辺』浅川遊男編、奈良国立文化財研究所シンポジウム報告、同成社
2000	12	日本建築学会大会研究協議会「家屋文鑑再考」

民家 研究年譜(宮澤智士:文献2引用加筆)

鹿児島県立短期大学紀要 第55号 (2004)

- 11 「日本の民家 1 農家・集落編」日本建築学会 1991 (昭和56) 年
- 12 「日本の美術 6 No. 289 民家と町並 中国・四国」文化庁監修 鈴木充1990 (平2) 年
- 13 「日本の美術 7 No. 290 民家と町並 九州・沖縄」文化庁監修 澤村仁1990 (平2) 年
- 14 「栃木県の民家」栃木県教育委員会1982 (昭57) 年  
【その他の関係する地域研究】  
民俗学関係
- 15 「南九州民家図帳」小野重朗 1963 (昭38) 年  
考古学関係
- 16 「琉球諸島に於ける民家の構造及び風習」宮良当壮1932 (昭6) 考古学雑誌建築史学関係
- 17 「日本農民建築の研究」石原憲治1932 (昭6) 建築雑誌
- 18 「日本農民建築 第1輯」石原憲治1932 (昭6)
- 19 「琉球建築」田辺 泰 1937 (昭11) 年 (再掲)
- 20 「南西諸島の民家」野村孝文1961 (昭36) 年 (再掲)
- 21 「鹿児島の民家-鹿児島県緊急民家調査報告書-」鹿児島県教育委員会1975 (昭50) 年 (再掲)
- 22 「鹿児島の民家 (離島編)」鹿児島県教育委員会1990 (昭55) 年
- 23 鹿児島大学における武家住宅に関する一連の研究 (土田充義・揚村固ほか) 1989 (平1) 年～